



変わりゆくポーランドの山歩き

津田 晃岐

私はこの 6 年間、ポーランドの西部のポズナン市に住んでいるが、かつて北海道大学で学んだことから、札幌とも縁が深い。現在、ポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学で学びつつ教えながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどう変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められ、喜んで筆を執った。

1. レクリエーション

ポーランドの山岳地帯は国土の南部に集中し、ウクライナ、スロヴァキア、チェコとの国境を成している。有名な固有名を挙げれば、東から、ベスキディ山地 Beskidy およびタトラ山脈 Tatry (ともにカルパティア山脈の一部に数えられる)、ステティ山地 Sudety などがある。

ベスキディ山地は標高 1000 メートル超の山々が連なり、東端ではスロヴァキアと、西端ではチェコとの国境を成す。「ベスキディ山地」というのは、いくつもの山地の集まりの総称で、個々の山地はそれぞれの固有名を持っている。マグラ国立公園から西へ延び、タトラ山脈の北を通過して、ビールで有名な町ジヴィエツまで続く。山地内には他にも複数の国立公園がある。最高峰は 1725 メートルのバビヤ・グラ山 Babia Góra (「姥山」の意味)で、俗にディアブラク山 Diablak (「悪魔の峰」の意味)とも呼ばれる。

タトラ山脈は標高 2000 メートルを超える山々が連なり、スロヴァキアとの国境を成している。麓にあるザコパネ市は、ウィンタースポーツの中心地として、また自然豊かな国立公園としても有名である。山脈の最高峰はスロヴァキア領にあるが、ポーランド側の最高峰は 2499 メートルのリスイ山 Rysy (「引っ掻き傷」の意味)である。

ステティ山地は標高 1500 メートル前後の山々が連なり、チェコとの国境を成している。「ステティ山地」とは、それぞれに固有名を持った山地を集めた総称で、複数の国立公園が山地内に存在する。最高峰は 1602 メートルのシニェシュカ山 Śnieżka (「雪玉」の意味)である。

どの山地・山脈にも 3000 メートルを超える山はないが、深い森だけでなく、岩場あり、断崖あ

りと、険しい地形に富んでいる。しかし、ポーランド人の場合、山の険しさが神聖さと結びついたり、山の険しさに厳かさを感じたりすることは、あまりないようである。

数年前、ポーランドの教育雑誌『ポロニスティカ Polonistyka』に日本の「山」の文化について記事を書いたことがある。山岳信仰が根強く残る日本では、登山は当然「巡礼」のような意味合いを持つ。だから、山頂に社殿が建てられたり、御来光に手を合せたりすることに何の不思議もない。

一方、ポーランドをはじめヨーロッパでは、「山」は「拝む」ものではなく、何よりもまず「挑む」ものであり、ある山に「登頂」ということは、その山を「征服」することにほかならない。もちろん、みな「登頂」にこだわるわけではない。それほど野心のない、ごく普通の山好きにとっては、「山」は「拝む」ものでも「挑む」ものでもなく、「歩く」もの、「楽しむ」ものである。山に「登る」というより、山を「歩く」のである。そして何よりも「楽しむ」ために山へ行くのである。トレッキングにハイキング、それからスキー、いずれもレクリエーションの場である。きれいな空気を吸い、体を動かし、気分をリフレッシュさせるのである。

とはいえ、ポーランド人の精神文化と「山」はまったく無縁ではない。ポーランドでは、夏に年少少女たちがグループで(もちろん、監督者とともに)山岳地へ出かけ、一緒に山歩きをしたり、キャンプをしたりする。また、学生同士で手頃な山小屋を借り切って夏休みを過ごすこともある。もちろん、夏山での避暑は若者たちに限らないが、特に寝食を共にして友情を育んだり、共同生活を通して人間として成長したりするという、若者の涵養の場としての「山」もポーランドの文化の中にはある。



テトマイエル

また、山岳地方は独自の文化を培ってきた。ベスキディ山地やタトラ山脈を舞台にした文学作品も少なくない。独特な文化に魅せられ、あるいはその中で育った作家も多い。「実証主義」時代のリアリズム作家マリア・コノプ

ニツカ Maria Konopnicka (1842-1910)と、両大戦間期の詩人エミル・ゼガドゥオヴィチ Emil Zegadłowicz (1888-1941)は、どちらもベスキディ山地ゆかりの文人である。また「若きポーランド」時代の詩人・作家カジミェシュ・プシエルヴァー＝テトマイエル Kazimierz Przerwa-Tetmajer (1865-1940)は「タトラの詩人」とも呼ばれる。

2. 「行楽歌」

今年のさっぽろ雪まつりの雪像作りにシュクラルスカ・ポレンバ Szklarska Poręba の人たちが参加したという。彼らの故郷も山岳地にあり、チェコとの国境沿い、ステティ山地の一部を成すカルコノシェ山地 Karkonosze の麓に位置する。



シュクラルスカ・ポレンバ

この町には、山岳地ならではの山歩きと結びついた面白い行事がある。毎年、夏に「ポーランド全国学生歌謡行楽交換会 Ogólnopolska Turystyczna Giełda Piosenki Studenckiej」と呼ばれる「行楽歌 piosenka turystyczna」の音楽祭が開かれるのだ。出演者に出演料は支払われず、入場は無料という、完全に非商業的な野外音楽祭で、演奏者は仮設テントの下の舞台上で演奏し、聴衆の頭の上を覆うものは、もちろん何もない。それどころか、聴衆は各自テントと寝袋持参で聴きに来る。この音楽祭は 1968 年以来、今でも続いている。

ポーランドには「歌唱詩 poezja śpiewana」という音楽ジャンルがある。それは韻文に曲を付けて歌うもので、時には歴史上の大詩人の作品に曲

を付けて歌われることもあれば、現代のシンガー・ソングライターのオリジナル曲の場合もある。シュクラルスカ・ポレンバの音楽祭で歌われる「行楽歌」もこの「歌唱詩」に数えられるが、主にハイキングやキャンプファイヤーの際に歌われ、レクリエーション・ソングといったところだろうか。「行楽歌」は、多くは若者たちによって歌われるため「学生歌謡 piosenka studencka」とも呼ばれる。

1971 年の音楽祭では「歌唱詩」の流れを汲む音楽グループ「ヴォルナ・グルパ・ブコヴィナ Wolna Grupa Bukowina」(「自由な集団・ブナ林」の意味)がデビューした。このグループは特に「行楽歌」をよく歌い、1985 年まで活動した。初期の代表曲「家の牧歌 Sielanka o domu」はこの音楽ジャンルの雰囲気をととてもよく伝えている。



ヴォルナ・グルパ・ブコヴィナ

昼と夜を招こう、
四方の風を招こう。
みんなにドアは開かれてるから、
誰かが最初の音を鳴らせば、
山に向かってコンサートをしよう。
ブナの季節の香りのする
演奏が壁に染みこんで、
疲れた放浪者たちを
音楽で休ませるだろう。
だって、そんなのが僕の家だから。
だって、そんなのが僕の家だから。
(リフレイン) 僕は探す、探さなきゃ、
ギターとペンとで家を。
僕の上には山が空のように、
僕の上には空が山のように。

3. 「巡礼」

先日カルコノシェ山地の麓の町クシェシュフ Krzeszów へ行く機会があった。クシェシュフは、シュクラルスカ・ポレンバから東へ 50 キロメートルほどのところにあり、ちょうどカルコノシェ山地を間に挟んでいる感じである。

クシェシュフには、中世以来のシトー会修道

院がある。シトー会は、カトリック教会最古のベネディクト修道会から11世紀に派生したが、戒律の厳守と清貧の生活、労働の尊重を特徴とした。シトー会士たちは進んで荒地に定住し、みずから開墾作業に従事し、土地を耕しながら農場を経営し、自給自足の生活をした。また近隣の農民たちを指導し、新しい農法の普及にも貢献した。クシエシュフでも、修道士たちは近隣の領主や農民たちと協力し、産業と文化の向上を図った。その結果、諸侯や領民たちから多くの寄進を受け、修道院はシロンスク地方最大の農地を持つようになり、クシエシュフは「門前町」ならぬ「修道院町」として発展した。

修道院の建物は、山地の中でさらに一段小高い丘の上にある。修道院は広大な敷地と、教会、礼拝堂、その他の多くの施設から成り、「恵みの聖母」と呼ばれるイコンが教会堂の中央祭壇を飾っている。このイコンは、13世紀前半に遡る、

ポーランド最古の聖母マリアの肖像だという。そしてイコンの名から、クシエシュフの町自体も「恵みの聖母の聖地」と呼ばれている。修道院は戦後に閉鎖され、今は修道士はいない。2004年、修道院の建造物群は国の「歴史記念物 Pomnik Historii」に認定された。

見学することができた教会堂や礼拝堂では、歴史の重みとともに厳かさが支配し、感動的だった。それよりも印象的だったのは、修道院の裏手の墓地である。それこそ質素な造りの墓石が幾列にも並び、すでに墓守をする者もいないのか、墓標が汚れたり、割れたりしている。しかし、そこに刻まれた名前を拾い読んでいくうち、今では知る人もなき彼らの人生と、今でも安らかに眠る彼らに思いを馳せ、その不思議な静けさに身も心も洗われる思いがした。山深い古の修道院への思いがけない「巡礼」となった。

つだ・てるみち
(ポズナン・アダム・ツキェヴィチ大学)

ソチ冬季五輪で ポーランドは 金メダル4個



津田さんのエッセイにもあるように、ポーランドの山岳地帯は南部の国境地帯に限られるので、スキーなどのウィンタースポーツはそれほど盛んではない。そのため、これまでポーランドが冬季オリンピックで獲得した金メダルはわずかに2個であった。その最初の1つが、1972年の札幌オリンピックのスキージャンプ90m級で金メダルを取ったヴォイチェフ・フォルトゥナ選手だった。

そのあと2010年のバンクーバーオリンピックでクロスカントリーのユスティナ・コヴァルチックが金メダルを獲得するまで、フォルトゥナの金メダルがポーランドにとって唯一のものであった。

本号で紹介したコザチェフスキ大使やスコヴロン教授は、大倉山ジャンプ競技場にご案内すると、お二人ともジャンプ台や、博物館に展示されているフォルトゥナの金メダルを伝える新聞記事を熱心に写真に収めていた。

ところが今回のソチオリンピックで、ポーランドは何と一気に4つも金メダルを獲得した。日本人に一

番よく知られているのは、スキージャンプのノーマルヒルとラージヒル両方で金メダルを獲得したカミル・ストフ選手だろう。



ストフ選手はラージヒルで日本の葛西紀明選手と闘い、日本人にとってはとても悔しい結果となったが、ストフ選手のライバルとあって、ポーランドのメディアでも葛西選手は非常に大きく取り上げられた。41歳にもかかわらずワールドカップで総合3位につけており、2018年の平昌オリンピックを目指していることを紹介し、彼のジャンプはインスピレーションに満ちていたと絶賛している。

そのほかにも、バンクーバーに続きユスティナ・コヴァルチックがクロスカントリーで、二連覇を果たし、足の甲を骨折しながらも10kmを完走してポーランド女性の精神力の強さを示した。

そしてスピードスケート男子1500mではズヴィグニェフ・ブルトカが、ポーランド人としては初めてスピードスケートで金メダルを取った。ポーランドにはスピードスケート用のリンクがないため、ベルリンにまで行って練習したそうである。

大躍進を遂げたポーランドのウィンタースポーツ界、次のオリンピックでの活躍が楽しみである。

佐光 伸一